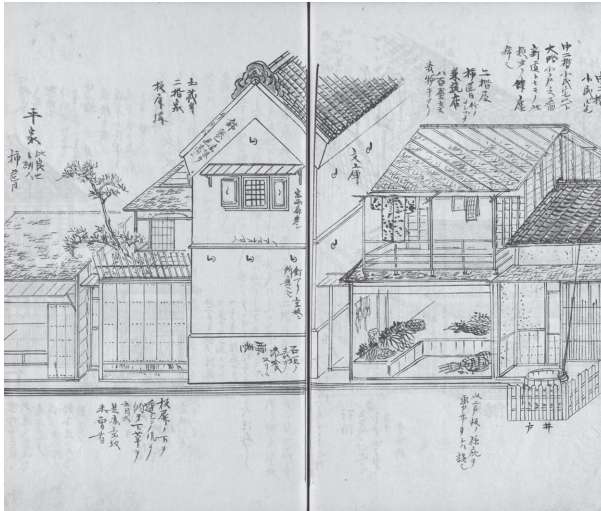


深川江戸資料館レファレンス③

よみがえる江戸の建築

江東区深川江戸資料館

1 展示室の建築物について



江戸時代の建物の様子（『守貞縋稿』国立国会図書館蔵）

展示室内にある大店や船宿などの建物は、昔ながらの建築工法と工具で再現しています。日本の伝統的な技術を駆使したことにより、江戸時代の深川佐賀町の町並みに臨場感をもたらすことができました。

日本古来の木造建築は、日本の気候と風土、生活条件に適しています。使われていた用材は、現存する遺構からもヒノキが多く、強度や化粧材としての美しさ、加工性の条件が揃っていたことが評価されたのでしょう。ヒノキ以外ではクス、ケヤキが用いられています。

2 建築の工法「^{つぎて}継手」と「^{しぐち}仕口」

用材を使う際、接合する工法として縄文時代の竪穴式住居にもみられる縄で結わうほか、糊で貼る、釘で打ち付けることがあります。最も精緻を極めたのが「継手」と「仕口」です。

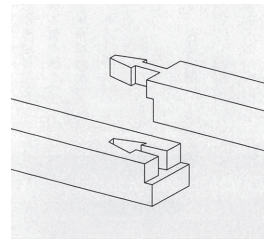
「継手」は部材の長手方面に接合し、「仕口」は二つ以上の部材の角度を変えて接合することをいいます。これらは目立つことなく組めるため、強さ・見栄え・組みやすさの技術が要求されました。

2-① 長屋の軒桁の継手

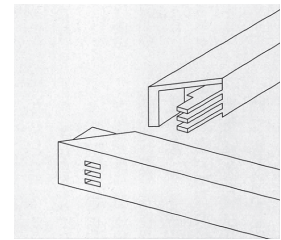
柱に近い部分で軒桁を継ぐため、先端を台形型に広げた^{ほど}柄を上から落とし込みます。現代でも使われる工法で、引っ張りに強い構造になります。

2-② 春米屋の^{かまち}上り框の仕口

三枚の柄が貫通して左の框に右の框が^{ほど}噛み合い45度に結合している構造です。隙間がない頑丈な造りが特徴です。



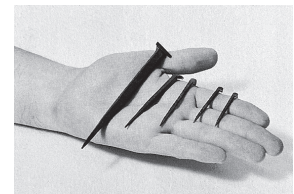
2-① 腰掛け鎌継ぎ



2-② 箱留め三枚小根柄

3 木造建築の道具「和釘（日本釘）」

日本の建築で釘が使われ始めたのは飛鳥時代といわれています。現在の釘は明治時代に伝来した洋釘の形ですが、神社仏閣や城郭など日本の建築には和釘が使われていました。太く角張った形をし、種類が多いのが特徴です。和釘は使い古した鋤や鍬を再利用し、一本ずつ手加工で作りました。



4 長屋について

江戸庶民が住んだ家は、一つの建物を壁で数戸に区切った長屋とよばれる形式のものです。

屋根は^{こしらぶき}柿茸（トントン茸）の木造建築で、江戸勤番中の武士は「火二焼るも江戸の家十軒は上方の一軒二かけ合ふ、箸を家建て糞で壁ぬるとハ、江戸小家の事なるべし」（『江戸自慢』）と、火事に弱かった江戸の長屋の様子を述べています。

4-① 長屋の壁「^{こまいかべ}木舞壁」

木舞壁は泥土や^{わら}藁などを混ぜて下地にし、竹や細木を格子状に藁縄で組んだ土壁です。

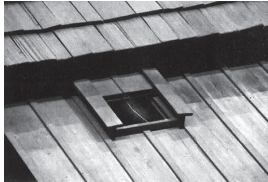
藁は乾燥のひび割れを防ぐことができ、柔軟な竹を使った下地は、建物の歪みができて木材と接している箇所が少し欠



ける程度で済みます。その反面、防音効果は低く、物を掛ける釘を打ち込んだら隣人の仏壇に突き抜けたという落語があるほど薄い壁でした。しかし、この壁が住人たちの人情を通い合わせてきたといえます。

4-② 長屋の天窗

屋根あるいは天井に設けられた小窓です。へっついかまど（竈）で煮炊きする時の排煙・換気用、採光として使われました。縄や麻紐を繋いで開閉しやすくしています。



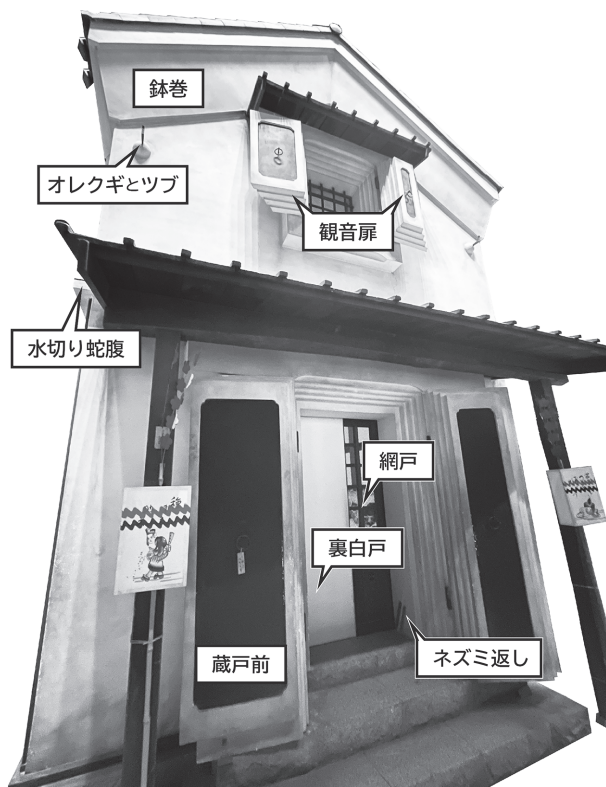
5 土蔵について

外壁が土壁と漆喰でできた土蔵は、その頑丈な造りから物品を保管する一方、財産を火災から守ることができました。

その歴史は古く、鎌倉時代初期の『春日権現験記』かすがごんげんげんきに火災で土蔵へ避難する人々の様子が描かれており、その頃から、防火を目的とした建物が成立していたと考えられています。

5-① 土蔵の扉

土蔵の扉は三枚で構成され、外側は観音開きの漆喰塗りの「蔵戸前」くらどまえといひます。蔵戸前の内側には「網



春米屋の土蔵の外壁

戸」があり、その二枚の扉の間にある「裏白戸」うらじろどは小火が起きたら閉める防火扉の役割がありました。

また、「用心土」ようじんつちといわれる粘土を扉の隙間を目張りすると密封する効果があり、防火に役立ちました。

5-② オレクギ（折釘）とツブ

土蔵の周囲には、かぎ状の和釘がついた漆喰の半球体があり、オレクギとツブといひます。

オレクギは軸物などをかける時に用いる和釘です。諸説ありますが、修繕で使う梯子の固定や縄をかけるために使われたと考えられています。ツブはオレクギに荷重をかけた際、ツブの損傷だけで済むので、土壁に亀裂が入るのを防ぐことができました。

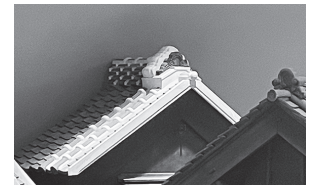


肥料問屋の土蔵のオレクギとツブ

6 鬼瓦と影盛

屋根にある飾り瓦の鬼瓦は、日本の建築でよくみられます。鬼面が有名ですが、それ以外の意匠も総称して鬼瓦とよびます。現在ではめでたい意味をもつ州浜すはまなどの意匠がみられます。

その鬼瓦の後ろにあるのは「影盛」といひ、鬼瓦を立派にみせるため、鬼瓦より漆喰を塗り重ねて大きめにつくりました。

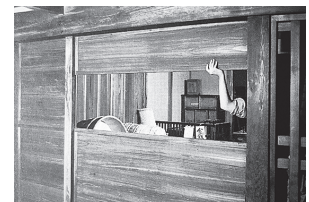


肥料問屋の土蔵の鬼瓦(奥の建物)

7 表店の和式シャッター「揚戸」あげど

近世の民家や店舗でみられる摺上げ板戸で、商品を店頭で陳列できるなど、広く使えることから普及しました。

展示室の八百屋と春米屋で再現した揚戸は、入口の左右にある柱の内側の溝に沿って、横長の戸板を上下に動かします。開ける時は上方の小壁の内側に戸板を収納することができました。



春米屋の揚戸を開めた状態

『資料館ノート』発行終了のお知らせ

『資料館ノート』は1996年の創刊以降、江戸深川の歴史を紹介してきましたが、一定の役割を終えたことを判断し、今号をもって発行を終了することとなりました。

約26年間という長きにわたり、ご支援くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。